様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　1 日現在

機関番号：16301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520796
研究課題名（和文）南部アフリカにおけるゲートウェイ都市の立地と変容に関する都市地理学的研究
研究課題名（英文）The study of urban geography about the location and change of the gateway cities in the Southern Africa
研究代表者
寺谷　亮司（TERAYA RYOJI）
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：10207491

研究成果の概要（和文）：本研究は，南アフリカ共和国のケープタウン，モザンビーク共和国のマプート，ナンプラー，ナカラ，モーリシャス共和国のポートルイス，コモロ連合のモロニなどの現地調査によって，南部アフリカ地域の都市群発達史，当該都市が発揮する港湾ゲートウェイ機能，都市内部構造や住民の混住・分離居住特性の実態を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, I carried out the field works of Cape Town in South Africa, Maputo and Nampla in Mozambique, Port Louis in Mauritius and Moroni in Comoros. As a result, each city of the Southern Africa has a characteristic feature in the urban system, the gateway function, the internal structure of the city and the segregation of inhabitants.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：都市・アフリカ・地理学・ゲートウェイ・ケープタウン・モザンビーク・モーリシャス・コモロ

１．研究開始当初の背景

（１）新開地のゲートウェイ機能：筆者は，これまで北海道および東部・南部アフリカ諸国の都市システム研究を主要研究課題としてきた。両地域は，近代以降に開発や植民が本格化した都市の歴史が新しい新開地である。新開地では，開拓地域の中心ではなく，旧開地に近い開拓地域の縁辺地域に都市がまず立地する。こうした都市は，広大な開拓

地域（植民地）と旧開地（本国）の遠距離地域間を結合させるゲートウェイ機能が卓越し，ゲートウェイ都市と呼ばれる。南アフリカ共和国におけるケープタウン，北海道における函館や小樽は，ゲートウェイ都市の典型である。後年になると，これら港湾ゲートウェイ都市の多くは，後背地域への近接性の低さ，貿易の衰退などから，開拓初期には卓抜していた経済的機能を喪失する。フロンティアの移動に伴う内陸都市の発生と内陸地域の産業発展によって，上記地域の経済中心都市は，ケープタウンからヨハネスバーグへ，小樽から札幌へと移動した。上記諸点を踏まえ，南アフリカ共和国，モーリシャス，モザンビーク，コモロの国家的都市システム特性，ゲートウェイ都市特性を考察したい。

（２）都市の内部構造研究：アフリカ都市では，急速な都市化にインフラの整備が追いつかず，劣悪な居住環境にある貧困者層の住宅地域（スラム）の拡大が顕著であり，最大のものは通常都市周辺部に位置する。このため，都市の古典的空間モデルである同心円モデルにしたがえば，アフリカ都市モデルの空間パターンは，住民の社会経済的階層が都市周辺部で高い先進国都市モデル（バージェス・モデル）とは異なり，住民の社会経済的階層が中心部で高い前近代都市モデル（ショバーグ・モデル）と同様のパターンとなる。こうした観点より，南部アフリカ都市の内部構造を解明したい。

（３）都市の居住住民特性：アパルトヘイト都市としてのケープタウン住民の民族別セグレゲーション，オランダ・フランス・イギリスと宗主国が変わるごとに卓越移民が変化したモーリシャスをはじめ，南部アフリカ地域の都市における民族別・社会経済階層別セグレゲーションは著しく，その実態把握を試みたい。

２．研究の目的

本研究の目的は，南アフリカ共和国のケープタウン，モザンビーク共和国のマプート，ナンプラー，モーリシャス共和国のポートルイス，コモロ連合のモロニなどの現地調査によって，南部アフリカ地域の都市群発達史と都市内部構造，当該都市が発揮するゲートウェイ機能，都市居住住民の多様性を反映した多民族・文化共生について考察することである。

３．研究の方法

本研究では，４つのサブテーマ，すなわち①各国の都市（群）システム研究，②都市のゲートウェイ機能研究，③都市の都市内部構造研究，④アパルトヘイト都市住民の混住・分離居住特性，の課題に挑戦する。研究方法としては，統計資料や参考文献の収集，事情に詳しい人々への聞き取り調査および現地観察調査である。現地調査を実施した研究対象都市は，南アフリカ共和国のケープタウン，モザンビーク共和国のマプート，ナンプラー，ナカラ，モーリシャス共和国のポートルイス，コモロ連合のモロニである。

４．研究成果

（１）各国の都市システム研究：アフリカ諸国において，首都における人口・経済の集中は概して顕著である。調査４ヶ国においても，南アフリカ共和国におけるヨハネスバーグ，モザンビークにおけるマプート，モーリシャスにおけるポートルイス，コモロにおけるモロニの人口・経済卓越性は一応認められる。ただし，モーリシャスにおいては，ポートルイスにおける朝夕の道路渋滞や土地不足などの都市問題が深刻となり，ポートルイスの人口は停滞・減少傾向となり，近年ではモーリシャスの有力企業が本社社屋を，ポー

トルイスから島中央部のエベネ地区に設立されたビジネスパークに移転する動きもみられる。このため，ポートルイスの人口・経済の卓越性は弱化しつつある。また，モザンビークにおけるマプートの地理的位置は広くて長い国土の南端にあるという特殊事情により，北部の中心都市・ナンプラー，中部の中心都市・ベイラなどの人口規模も比較的大きい。同様に，国土が主要３島から構成されるコモロも，人口や都市機能の分散傾向が必然となり，首都一極集中の度合いはそれほど高くはない。南アフリカ共和国における政治的首都はプレトリアであり，ヨハネスバーグはいわば経済的首都である。以上のように，上記４ヶ国の都市システムは，それぞれの地理的要因などにより，首都卓越性は他のアフリカ諸国と比べ顕著ではない。

（２）都市のゲートウェイ機能：上述のように，ゲートウェイ都市は，初期には後背地域への玄関として繁栄するが，後年になると当初有利に作用した地理的位置が内陸地域の発達に伴い，後背地域の縁辺地点という不利な条件へと転化し，経済機能が衰退する運命をたどる。南アフリカ共和国における卓越ゲートウェイ都市は，内陸首都圏の発展に伴い，ケープタウンからポートエリザベスさらにダーバンへと移動した。モザンビークにおいて，マプートはモザンビーク国内南部のみならずむしろ隣国ヨハネスバーグ都市圏を後背地として活発なゲートウェイ機能を保持している。同様に，中部のベイラは国内中部のみならずジンバブエ，北部のナカラはマラウィなど隣接国への国際コリドール（回廊）としての優れたゲートウェイ機能をもっている。これに対し，モーリシャスのポートルイスとコモロのモロニは，小さな島国として経済規模や経済範域が狭く，ゲートウェイ機能が限定的である。

（３）都市の内部構造：都市の内部構造は，大きく都心の CBD（中心業務地区）と周辺の住宅地域に二分できるが，その地域構造は国の経済水準に大きく規定される。ケープタウンにおいては，都心のオフィスビルや中心商店街の他，郊外にショッピングセンターが数多く立地する。住宅地域は，西部や都心近傍に良好住宅，東南部や郊外に黒人居住区の不良住宅が多く，住宅格差が著しい点が特徴的である。経済状況が良好なモーリシャスのポートルイスにおいては，都心のオフィス・商業ビルとともにインド人街や中国人街など多宗教景観が特徴的である。住宅地は，都心近くでは良好であり，郊外に多少不良住宅が見られるが，スラム地区の少なさと狭小さがむしろ特徴である。モザンビークのマプートやナンプラーの都心地区は，老朽化しているオフィスビルや低層商店街に加え，敷地の広い高級住宅や空地が混在しており，道路沿いには露天商や行商人が極めて多い。都心地区の周辺には，すぐに低層低級住宅（スラム）が隣接し，都市縁辺まで延々と連なる。コモロのモロニにおいては，都心地区は，官庁と銀行が並ぶ狭小な業務地区と歴史の古いアラブ人街景観を呈するオールドタウン（手入れはされていないが中・高級住宅地区とみなし得る）で形成され，中心商店街は存在しない。都心地区以外は，道路沿いに商店や露店，それ以外は不良住宅が立地する住宅地域となる。以上のように，各都市において，「郊外ほど居住人口の社会経済階層が低下する」アフリカ都市特有の同心円構造は確認できるが，その状況には大きな違いがみられる。

（４）アパルトヘイト都市の居住住民特性：アパルトヘイト都市は，民族別居住地区が設定され，民族別居住分離が徹底的になされた都市である。民主化後においても，旧黒人居住地区には黒人，白人高級住宅地区には

白人が居住し，民族混住化が見られるのは，カラード居住区や白人低級住宅地区のごく一部にすぎず，民族別居住パターンは不変である。ケープタウンにおける黒人分布について，異なる分析スケールに基づけば下記のような知見が得られる。州（縮尺 1／100 万）スケール：黒人は少ない（ケープ州はカラードが多い），都市圏（同 1／25 万）スケール：過大な黒人居住区の存在（黒人は東南部郊外に多い），都市地区（同 1／5 万）スケール：西部や半島部にも小規模黒人居住区が存在（ハウトベイ地区に２箇所など），都市街区（同 1／1 万）スケール：黒人居住区の土地利用（Imizamo Yethu 地区入口付近には商店，屋台，酒場などの盛り場が立地し，家屋は山腹方面に拡大中など），都市ブロック（同 1／2500）スケール：１軒ごとの店舗利用（同地区の盛り場にはソマリア人商店，山羊頭焼屋台，モルトビール酒場があるなど）。

以上，本研究の研究成果を概観したが，当該地域の都市事情は，従来からの研究成果が極めて僅少な「知られていない」地域であり，今後本研究の成果をきちんと論文にまとめ，本研究の責務を成し遂げたいと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 寺谷亮司（2010）：「日本の広域都市間ネットワークと横浜市の都市機能」，Proceedings Joint International（Asia Economic Community Forum）Symposium by Korean Urban Geographical Society and Economic Geographical Society of Korea, 205-219.

② 寺谷亮司（2009）：「ポートルイスとカトルボルヌーアフリカの小さな島国の首都と商業都市－」，都市地理学, vol.4, 106-113.

〔学会発表〕（計３件）

① 寺谷亮司，「ケープタウン－様々な分析スケールからの都市叙述の試み－」，東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」公開国際シンポジウム（東京都府中市，東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所），2011 年 12 月 17 日.

② 寺谷亮司，「日本の広域都市間ネットワークと横浜市の都市機能」，第 2 回アジア経済共同フォーラム国際会議（韓国仁川市，Songdo Convensia A），2010 年 11 月 6 日.

③ 寺谷亮司，「モザンビーク共和国の都市と風土」，愛媛地理学会（愛媛県松山市，愛媛大学），2010 年 6 月 26 日.

〔図書〕（計２件）

① 寺谷亮司（2012）：「コモロ」，「セイシェル」，「モーリシャス」，小学館日本大百科全書（ニッポニカ），小学館，デジタル版，分量は各国約 4000 字.

② 寺谷亮司（2011）：「都市とその機能」，山下克彦・平川一臣編『日本の地誌３北海道』，朝倉書店，124-135.

〔その他〕
ホームページ等
http://www.teraya-lab.com/

６．研究組織
(1)研究代表者

寺谷　亮司（TERAYA RYOJI）
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：10207491

(2)研究分担者
該当無し

(3)連携研究者
該当無し